



# グローバル化と ダイバーシティを ALJが推進する理由

株式会社エーエルジェイ 代表取締役社長

**釘嶋 博之** Kugishima Hiroyuki

## 【略歴】

2000年、ITベンチャー企業にエンジニアとして入社。2003年、マネージャー就任。2004年、執行役員と歴任し、技術部門、営業部門、人事部門、経営部門と全社の経営戦略・事業戦略に中核メンバーとして幅広く携わる。2006年より、アドバンスト・リンク有限会社(現 株式会社エーエルジェイ)設立、代表取締役社長 兼 CEO就任(現任)。2013年3月、市場調査・自己研鑽の機を得て、アメリカ、アジア諸国(7か国)を1年ほどかけ歴訪。帰国後、ALJグループ構想「新10年ビジョン」を立ち上げる。2014年4月、ALJ Myanmar Co.,Ltd.設立、Chairman就任(現任)。2015年10月、ALJ Education Plus株式会社設立、取締役就任(現任)。2016年4月、ミャンマー法人STUDY & WORK JAPANと事業提携、Executive Adviser就任(現任)。2020年5月、ALJ DXTech設立、取締役就任(現任)。ALJグループ構想「新10年ビジョン」実現に向け、次世代のビジネスモデルを自らプロデューサーとして奔走する傍ら、近年においては後進の育成にも積極的に携わり、ALJ Group CEOとして果敢に挑戦を続けている。

2006年の創業から延べ15年以上にも渡る企業活動の中で、ワークシフトからなる労働環境の整備や外国籍社員の積極採用、2021年以降にはインドネシアに海外法人2社目を設立予定等、ALJがグローバル化とダイバーシティを推進する理由についてトップインタビューを実施致しました。

## 業界構造を変えたかった

— まずは、会社の成り立ちからお聞きします。ALJは2006年4月に設立されましたが、どのような経緯で設立に至ったのですか？

2000年代初期のITバブルも終わる頃、別業界で営業職を経験した後、エンジニアとしてITベンチャー企業に就職しました。その当時のIT業界は、それ以前の3、40年の間に、建築業界のような縦割りのピラミッド型構造が構築されており、最新技術を扱っている業界でありながらビジネスモデルはとも古く、閉塞感のあるものでした。日本は世界に誇れる高度な技術を持つていたにもかかわらず、最先端のサービスやチャレンジを実現させるためには何重にも重なる上司への承認作業が必要で、また出る杭は打たれるような慣習でしたので、今の日本経済の衰退は必然ではかありませんでした。そして、この時期よりインターネットを中心としたITサービスが急速に欧米のものに置き換わってゆくのをリアルタイムで垣間見ることになりました。その激動の最中、ALJを起業しました。今でこそ力強く発信している「この業界構造を変えたい！」という明確なビジョンを持つまでにはまだ至っていませんでしたが、

創業のきっかけとなった「全てのエンジニアが平等に評価されチャレンジが出来る会社を創りたい！」という想いは確固たるものでした。

## 人口減少・少子高齢化から、新しいビジネスモデルの構築

— 海外にオフショア会社を設立したきっかけは何ですか？

起業当初「創業10年、社員数1000名、売上高10億」という営業らしい語呂の良い目標を掲げ、業界の激動の変化の中でも時代の流れに合わせ変化しながら、毎年10%前後の順調な成長を続けていきましたが、2012年、日本の問題からなる社会構造の変化が加速する最中、想像していたよりも相当早く、これまでのビジネスモデルでは通用しなくなると考えるようになりました。

日本の人口は2010年頃ピークを迎え、人口減少、少子高齢化が叫ばれると同時に日本経済の低迷により、以前は沢山出稼ぎに来ていた中国人や韓国人、インド人の優秀なエンジニア達が日本から消えてゆきました。そして、日本人のエンジニア自体も極端に減少していることに気がついたのです。

自己研鑽も含めて2013年から1年ほどかけて、米国やアジア各地を訪れ、直接自分の目で見渡した時、業界も日本の働き方もガラパゴス化していると痛感し危機感を覚えました。日本の業界構造を変えるためには、まずは自分の会社を根本的に変えなくては行けない。これまでのピラミッド構造のビジネスモデルで会社を成長させていくのではなく、次世代型の多様性と広がりを持たせたWEB型の組織モデルへとシフト